



I. はじめに

実践報告協力者から指定難病である友人との出会いを通し、葛藤しながらも自分自身を見つめ、自分の中の差別性に気づいたことが語られた。そして、今の自分を変えたい、差別を許さない生き方につなげていきたいということ語った。その後、討議課題を確認し、「差別の現実から深く学ぶこと」「事実と実践に基づいた厳しさや「私だったら」「私の学校・園・所・家庭・地域だったら」という立場での温かさや熱さのこもった発言や実践交流をお願いし、報告や討論を始めた。

II. 報告及び質疑討論の概要

—報告1—⑥

「おーい ともだちになろう こえかける ～文化の違い、クラスの壁を乗り越えようとするアーシャから学ぶ～」
(埼玉県人教)

—主な質疑と意見—

石川 特別支援学級で給食を食べるのが気になった。交流学級で一緒にという存在ではないのか。

報告者 自分の地域では、給食や掃除については進んでいない。特別支援学級と交流学級との壁があると思う。厳しい現状がある。今年、異動したばかりなのでこれから職員に提案していきたい。

滋賀 両親の思いを教員としてどう受け止めて支援や活動をしているのか。

報告者 両親(特に母親)は日本語があまり話せないの、アーシャちゃんの思いを言葉や絵で伝えることを心がけている。翻訳のシステム(アプリ)を使いながら会話している。

佐賀 アーシャさんの母親とのコミュニケーションについて、母親への日本語を学ぶ支援等はないか。

大阪 自分が住んでいる地域には日本語支援の体制がある。報告者の地元ではどうか。

報告者 父親は母親にもっと日本語を学んでほしいという思いがある。父親は大学で学んでいる。自分の住む周辺には学ぶ場所がない。学ぶ仕組みづくりの必要性を改めて強く感じた。先進的に取り組んでいる先輩もいるので、アドバイスをもらいながらがんばりたい。

—報告2—③⑥

「教師面して立っているんじゃあ、本音は語ってくれないよ」
(鹿児島県同教)

—主な質疑と意見—

京都 保護者や子どもの不安を課題として捉えて取り組む報告者に感銘を受けた。学校(教師集団)の中で一緒に取り組まれている方(なかま)、支えはいたのか?

滋賀 自分は草津市の啓発活動を続けている。(部落の人から)学校の先生には(自分のこと、本当のことを)言いたくない、という言葉聞く。実践をふり返って「教師面」の意識をなくそう小さくしようと努力した経緯を教えてほしい。

報告者 子どもたちどうしのなかまづくりと比べ、教員の集団づくりの難しさを感じる(2~3人はいるが全員はできていない)。それでも確実に自分を見てくれている先生たちがいる。自分を語ったり、二人で話したりしてなかまをつくっている。自分を差し出すと、子どももおとなも心を開いて自分を差しだしてくれる。教員・教師という意識でなく人間として付き合っている。

京都 今の学校で初赴任。自分が勤める学校も家庭環境が厳しい子ども、登校を渋る子どもがいるから。(報告より)「課題から逃げることではなく、今の状況に安心を得ることから課題に向き合わせる」が大切だができていない。中学校へのつなぎで大切にされていることは?(保護者とのかわりも含めて)

報告者 孝二の姉の高校定数内不合格の偏見を拭うべく、自分の思いが伝わる中学校の先生二人とつながって、情報交換や話し合いを重ねている。

福岡 「ぼくは、この学校をやめて養護学校に行くからね」と孝二が言った真意とは?

報告者 母親から「やっぱり4月から養護学校ですかね?」という質問を受けた。家庭内で、そのような会話が合ったのかもしれない。養護学校のことについて発言の時点では、孝二自身は知らなかった。

—1日めのまとめとして—

2本の報告を通して、子ども・保護者の本当の思い・願いを知るためには、まず私たちが1人の人間として自分をさし出す。向き合う。子どものことを本当に知ろうとするためには、家庭訪問などをして保護者と語り合い、家庭を知る、そして家庭や子どもの背景にある社会の課題を見ること。そして、その上で、子どもたちの将来を考え、願いをもって取り組んでいくこと。そして、差別は「周り」にあること。だからこそ、私たちの立ち位置が問われ、共に生きるためにどう行動していくのか、どう私たちが仲間をつくって共にすすめていくのかということが重要であると共有できた。

—報告3—④⑥

「みんなが…やさしくなってほしい」～いつも、ぼくばかりおこられるもん～
(滋賀県人教)

—主な質疑と意見—

福岡 「配慮ではなくともにあること」というのは？

報告者 Aは、周りからのやさしさへの違和感や（宿題教役でも）してもらってる・してやっている関係で（だからあえていじわるする）上か下か含まれていると嫌がる。本質をついていると思う。やさしさの裏にある関係からの脱却したい思いがある。

福岡 児童支援加配教員としての取組「担任を乗り越えてのかかわりはできるだけしない」について詳しく聞かせてほしい。

報告者 その場でなく、後から担任に子どもの様子を伝えたり、自分が一緒に関わったりすることを心がけた。

鹿児島（報告から）部落の課題が見えづらい。「かもしれない、そのようだ、」という予想しか見えなかった。事実が見えなかった。本気でつながりたいのであれば、事実を差しだしてみても？子どもと報告者をつながるのは、その一点ではないだろうか？（以前であったムラの子の話より）楽しいことにつながったともだちは薄っぺらい。苦しいことにつながった友だちは深い。そこが人権が確立する瞬間なのかもしれない。本質的なつながりをつくっていききたい。

—報告4—②⑤

「こんど、いつ集まるん!？」～“民族学級”から“ハピネスワールド”へ（大阪市人教）

—主な質疑と意見—

大阪 立ち上げ時の実際をもう少し詳しく教えてほしい。朝鮮文化研究会等の校内サークル活動が自分の学校でも長く続いている。しかし、続いていくと手段と目的が入れ替わっていないかという危惧があるがどうか。

報告者 形式的にならないように活動している。立ち上げ時のことは、詳しい人にパスしたい。

報告者の知り合い 立ち上げた集いに声をかけても、まったく集まらなかった。毎朝正門に立って、子どもに言い続けた。1回目は30人くらい集まった。作る・食べる活動からすすめた。周囲からの疑問や反対はなく、快く周りが受け入れてくれた。教師が集団としてつながっていたのが、子どもたちにも伝わったからだと思う。一步踏み出すことが大切だと思う。

滋賀 つながりのない子どもたちへの声掛けや、まわり子どもたちへの発信はできているのか。

愛媛 汲み取った思いを、どうまわりに広げているのか。

報告者 まだまだ課題であり、解決していないが、各学年課題実践を毎年4～5時間実施している。多文化共生についての学びを各担任で行い、伝えている。

滋賀 民族学級や多文化共生の取組・活動を、周囲へどう広げていっているのか？

報告者 チョソンやハピネスに行く際に、クラス

の子がいる前でも「今から行ってくる」というと周囲の子が「行ってらっしゃい」というやりとりがあり、安心して活動できている。いつでもどの場面でも機をとらえて発信すること続けている。また、写真で活動を記録し、カラー印刷して通信として配布している。

協力者 はじめてハピネスを開催した時、解放されたように母国語で話し、笑顔で活動する子どもを見て、今までストレスや何か抱えていたものがあつたと感じたか。

報告者 チョソンの会の子どもたちがリードして母国語を話すことのよさを気づかせる声掛けや雰囲気づくりをしてしてくれてる。そこが子どもたちの態度や表情に表れているのだと思う。

大阪 未来を創っていく、未来像をぜひ語ってほしい。

報告者 未来に向けて…多様な面から物事を見たり活動したりできる子どもを育てたい。そのためにオモニをはじめとした保護者や先輩方に学びながら取り組んでいきたい。外国ルーツがある子と接することで子どものしんどさに気づかせてもらえた。まずは自分が関われる子どもたちから支えていきたい。ともに生きていけるように活動していきたい。

—報告5—②①

「同和問題学習をするから同和問題がなくならんのだじゃないん」（愛媛県人教）

—主な質疑と意見—

京都 「同和問題学習をするから…」を言わせている背景は何か。

報告者 報告者やクラスの子へ同和問題の解決へ取り組む本気度を見せてほしくて発言したのではないかと考えている。クラスの子どもたちからは、「しなくてもいい」という後ろ向きの意見は出ず、本人は、それを黙って聞いていた。

大阪 コウジの進路と進路選択について聞かせてほしい。

報告者 進路選択の際に何度も家庭訪問等をして話し合った。1年生の途中から登校できていない、3年生でも休むことも多い状況だった。選択肢は通信制や定時制（兄が定時制）を提示したが、就職するというコウジの意志が固かった。お父さんも本人の強い意向を受け入れて、高校は受験せず就職した。

鹿児島（コウジの人間関係について）子ども会ではできて、学校でコウジらしさを出せなかったのはなぜか。自分事にするために自分たちの生活の問題と部落問題を重ねて語るべきだったのではないかと。

報告者 小学校時代から続けている子ども会では登校できていなくても受け入れてくれる仲間がいる。学校での仲の良かった子どもたちが自分から離れていったことで、子ども会へ存在が強まったのではないかと。学級開きの時に担任教師が自分の思いを語る時間を設けている。自分の友達と

の失敗談や相手を傷つけてしまった話等をして、学習に位置付けている。相手の思いを自分のしんどかった時の思いと重ねることの大切さを学級経営で最も大切にし、語っている。

大阪 地域啓発活動を学習に組み込んでいるが、もう少し具体的に聞かせてほしい。

報告者 地域の取組から（市民意識調査の身元調査より）学び、市民の意識の中でのおかしさに生徒が気づいていった。そのおかしさを発信するためには…という流れから地域啓発活動をしている。啓発活動を街頭で行うことでの難しさや戸惑いについて振り返り、次回以降につなげている。

滋賀 教師の年度初めの語ることに、子どもたちからの返しは？黙って聞いているだけだったのか？

報告者 子どもたちは様々な小学校から入学してきている。クラスの子どものどうしの関係が未成熟な段階で語らせることはしていない。クラスの成長とともに段階的に行っている。

滋賀 子ども会の年度末の発表会について規模や会場、参加対象等を詳しく教えてほしい。

愛媛（フロアから）子ども会は教育集会所単位で行っている学習会である。地域の方や自治会の方も巻き込んで開催。小中学生や教職員集団も参加している。（集会所まつり等発表会形式で）

京都 学習後にコウジの保護者や地域の方に報告して、どう感じられ、思いを持たれたか。

報告者 父親は周りの人とのつながりの中で生活できているので、自分も地域のパトロールや見守りもしている、と語ってくれた。

京都 先に出た地域啓発活動を行う中で地域の方と先生のやりとりする姿を見て、子どもたちはどう感じていたのか。

報告者 20分くらい互いの思いを語り合ったがわかりあえなかった。子どもたちには後で聞いていない。そのままにはできないので、啓発を続けている。

不明 教職員集団になかまとして何を望んでいるか？

報告者 いままで自分一人で同和問題学習をしているとは、一度も思ったことはない。まわりの先生方や環境に恵まれているので感謝しかない。一緒に学ばせていただいている。

愛媛 30年ほど前から愛媛方式（行政と教育の協同）という方法でやっていっている。教職現場は若返りがあり、しっかりとした伝承が必要である。熱心なところとそうでないところの温度差の問題があるが、今から先は、楽しみ。差別なくなっていくのでは、と思う。教職員集団がどれだけ地域や家庭に足を運ぶかが大事。同和問題学習の事前事後に家庭訪問して差別にさらされる姿が見えたので、学習を続けていく事が大切だとわかった。

Ⅲ 総括討論およびまとめ

各々が自分の実践を差し出しながら交流し合

うことを確認し、総括討論がスタートした。「教師面」というキーワードで、自らの実践や姿勢をふり返っていった。そして、子どもたちが学校や地域の中で、人権が保障され、確かな成長を促すための支援、進路を保障するために展望のある支援の在り方が問われた。「教師面」で接するのではなく、子どもたちが自らの本音を語り、変容していく姿を見守っていくおとなの在り方の体現が必要であった。しかし、子どもたちを支援するおとなたちの横のつながりを確かなものにしていく難しさも浮き彫りになった。

次に、学校体制や学校間連携の有効性のある取組は確立されておらず、ひとり一人のつながりと積極的な思いの中で細々と保たれている実態も明らかになった。わたしたちは、そこで孤立するのではなく、志を同じくする「なかま」をじっくりとみつけ、「つなぐ」活動を進めなければならぬことも確かめることができた。「世代交代」が進む中、危急的な行動、「伝承」が必要になっているとフロアとともに実感できた。

さらに、私たちが求める教育活動は、子どもたちの現象面に対処するのではなく、実態から編みなおさなければならないということも再認識できた。さらに、今そこにある課題から目を背けることなく解決しようという意思を持って行動する姿勢の確立が私たちに強く求められることも共通認識できた。また、学校教育の場、地域との連携による課題の解消に向けては、個々の課題としてばかりではなく地域、学校の実態を行政の立場にも再認識を図り、協調して取り組む必要性も指摘された。私たちが差別の現実苦しむ子どもたちの実態を自らの課題として認識し、発信し解決しようという行動を保障する環境づくりも今そこにある課題として確認できた。

わたしたちおとなが「教師面」せず子どもの育ちや背景を見つめ、子どもどうしを「なかま」として「つなぐ」丁寧な取組が今こそ求められている。「世代交代」が進む中で部落問題学習の充実や地域啓発活動の推進などを若い世代へ確実に「伝承」することの重要性を再認識し、これからも実践や取り組みを続けていくための力を与えていただいた第7分散会となった。